

IoT 環境に適したハッシュ連鎖による認証

研究キーワード： セキュリティ、認証、IoT、ハッシュ関数、ハッシュ連鎖

情報科学部・システム工学科

准教授 双紙 正和 Masakazu Soshi

研究シーズの概要

本研究では、ハッシュ連鎖の新しい構成法（ハッシュ連鎖アグリゲーション）を提案し、柔軟で効率の良い認証を実現します。特に本研究で実現する認証は、効率がよく、IoT 環境（計算機リソースが乏しくデジタル署名が困難な環境を想定）における相互認証に適しています。

研究シーズの詳細

◆研究例◆

ハッシュ関数は、一方向性を持ち、効率よく計算できる関数で、量子コンピュータに対しても安全ということから注目されています。さらに、ハッシュ関数を繰り返し適用した、ハッシュ連鎖と呼ばれる技術（ワンタイムパスワード、ブロックチェーンなどに利用されている）があります。本研究では、ハッシュ連鎖の新しい構成法（ハッシュ連鎖アグリゲーション）を提案し、柔軟で効率の良い認証を実現できることを示

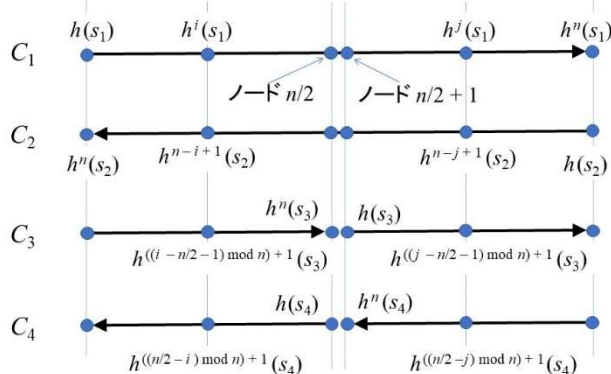


図 1. ハッシュ連鎖アグリゲーション (n = 4)

ました（図 1 参照）。

ここで、図 1 では、 h は一方向性ハッシュ関数、 s_1, s_2, s_3, s_4 はそれぞれハッシュ連鎖の初期値を表します。そして、 $n = 4$ のハッシュ連鎖アグリゲーションでは、 i 番目のハッシュ値の組み合わせを、 $h^i(s_1), h^{n-i+1}(s_2), h^{((i - \lfloor n/2 \rfloor - 1) \bmod n) + 1}(s_3), h^{((\lfloor n/2 \rfloor - i) \bmod n) + 1}(s_4)$ の四個の値からなる組み合わせとすることができます（一般の n では、より複雑な構成となります）。こうして、図 1 では 4 方向のハッシュ連鎖を構成できます。一方、ワンタイムパスワードなどの従来のハッシュ連鎖は、一方向のみしか考えられませんでした。

本研究で提案するハッシュ連鎖アグリゲーションの大きな利点は、デジタル署名を使わず、ハッシュ関数のみを使って、相互認証を実現しているという点です。そこで効率よく計算を行うことができ、IoT 環境（計算機リソースが乏しくデジタル署名が困難な環境を想定）における相互認証を実現するのに適しています。また、ハッシュ連鎖アグリゲーションを自由に構成することができるため、さまざまな組織やグループに適した柔軟な認証を行うことが可能です。

想定される用途・応用例

- ◆IoT 環境（計算機リソースが乏しくデジタル署名が困難な環境を想定）における相互認証
- ◆キーエスクロー（政府や裁判所が認めた場合、ユーザの鍵を強制的に公開する）の実現
- ◆一般に、さまざまなユーザグループの相互認証やワンタイムパスワード

セールスポイント

◆本研究は、以下の国際会議で発表されました：

Y. Kurihara and M. Soshi. “A Novel Hash Chain Construction for Simple and Efficient Authentication.” In 14th Annual Conference on Privacy, Security and Trust (PST), 2016.

◆いくつかの科研費として採択され、研究を行ってきました。

問い合わせ先：広島市立大学 地域共創センター

TEL:082-830-1764 FAX:082-830-1555

E-mail:ken-san@m.hiroshima-cu.ac.jp

〒731-3194

広島市安佐南区大塚東三丁目 4 番 1 号

(情報科学部棟別館 1F)